

第62号

● 目次 ●

巻頭言	1
東北アジア学術交流懇話会 公開講演会	2
日本研究と国際交流	2
センター内共同研究、プロジェクト・ユニット研究会	3
センター関連出版物	5
客員教授紹介	6
受賞	6
新任紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

巻頭言

地域研究の課題としての「境」

 東北アジア研究センター長
 岡 洋樹

「越境」とか「跨境」をキーワードとする研究プロジェクトは数多い。ただ一言で「境」といっても、国境のように強制力が働く「境」もあれば、文化圏のように学者が設定した境もある。なぜ「境」や、それを越えたり跨がったりすることが関心を誘うのだろうか。

一般に「境」を設定すると、ものごとを説明しやすくなる。というよりは、なにかを説明するために「境」が必要なのである。しかし一度設定された「境」は、人の動きや物の考え方を境界線の中に押し込める機能を果たすから、なにかしら越えてみたくなるのだろうし、「新説」を出そうと思えば古い説明のために作られた「境」は別の「境」で置き換えなければならない。国境だって本来何の線も無かったところに無理矢理引かれることも多かったのだから、概念上の境ならば、頭の中で越えるのは容易なわけである。

ところがその一方で、グローバル化のように、敷居が低くなることで期待と心配がないまぜになった反応を引き起こす現象もある。人間社会という意味では、グローブの外側との「境」には意味がないのだから、これは「境」がなくなることを意味する。となるとこれは説明しにくい。だからグローバル化の研究というと、とかくそれがもたらす内なる相克の問題となる。つまりグローバル化問題というのは、すぐれて無くなるなり、低くなるなりする「境」の問題、あるいは「境」が無くなる（かもしれない）ことに伴う諸問題なのである。

ところで、地域を設定するという事は、人の社会の内

側に線を引く行為にほかならない。グローバル化（あるいは普遍化）をよしとする向きから見れば、これは「細部」にこだわっているようにしか見え、へたをすると「反動的」な代物なのである。もしそれに意味があるとすれば、

その「反動」が社会の中に現実に存在する場合である。このあたりから、「グローカル」などという造語が生まれるのだろう。あるいは、国際経済やインターネットのような、グローバル化された社会における「グローバルな部分」の研究という意味で「グローバル領域」を設定することも可能かもしれないが、そこでの「グローバル」は社会の特定の領域の問題、つまり社会の中のグローバルな傾向、あるいはそれを指す動きにすぎず、部分的という意味では「ローカル」、というか「パーシャル」なのである。

ここまで考えてみると、「グローバリズム」というのがかつての「インターナショナリズム」と本質的に何が違うのか、やや不分明になってくる。マルクスが析出した「階級」という国を超える普遍性のテーゼは、思想史上のエピソードになりつつある。「グローバル」が同じ運命をたどらないという保証はない。とすれば、「地域」を研究することの意味もなくなりはいないだろうと思うのは、楽観的に過ぎるであろうか。



最近のシンポジウム等

① 東北アジア学術交流懇話会 定期公開講演会
**PM2.5 問題は東北アジアにおける
 緊張緩和のきっかけとなるか？**
 —越境大気汚染の現状と課題—



永島達也博士



明日香壽川教授

東北アジア学術交流懇話会の定期講演会が 2014 年 5 月 30 日に、東北大学の東京分室にて二人の講師をお招きして開催された。

一人目の講師である永島達也博士（独立行政法人 国立環境研究所地域環境研究センター大気環境モデリング研究室主任研究員）は、大気輸送モデルと呼ばれる数値モデルを用いてアジア地域における大気汚染物質分布の再現や将来分布の予測を研究されている。今回は「日本における大気汚染の現状と未来：越境大気汚染はどの程度問題か？」というタイトルで、自然科学的観点からのお話をいただいた。永島氏は環境基準の未達成が問題となっている PM2.5（粒径 2.5 μ m 以下の粒子状物質）と光化学オキシダント（化学種はオゾン）の東北アジア地域における広域輸送を数値モデルによって調べた。数値計算の結果から PM2.5 および地表オゾン濃度に対する他国からの汚染寄与度を算出し、日本においては PM2.5、地表オゾンともに越境大気汚染が無視できない程度に存在することを示された。

二人目の講師の明日香壽川教授（東北大学東北アジア研究センター教授）は、大気汚染問題、地球温暖化問題、エネルギー・ミックス問題などのエネルギー環境問題を政治経済学的な観点から研究されおり、日中両国の環境政策にも詳しい。明日香氏には「越境大気汚染における科学と政治 - PM2.5 問題は日中間の緊張緩和に役立つか？」というタイトルで、政治経済学的観点からのお話をいただいた。明日香氏は、東北アジアの PM2.5 問題は、これに対処するための国際的な枠組みの形成、発展をととして、日中間の緊張緩和に役立つ可能性があるとして分析された。ただし、枠組み成立のために必要な条件が多く存在し、枠組み成立への道のりは険しい。これら必要条件を満たすための努力を行うと同時に、日中双方に利益になる方法を見つけて協調の道を探っていくことが重要であると指摘された。

※本講演会の詳細な報告が東北アジア学術懇話会ニューズレター『うしとら』の第 62 号に掲載されています。

（岡本 哲明）

② 日本研究と国際交流

—アメリカ・シカゴ大学「Reading Kuzushiji Workshop」—

2014 年 6 月 16～20 日の 5 日間、アメリカ・シカゴ大学主催の「Reading Kuzushiji Workshop」に講師として招かれた。このワークショップは、江戸時代の「くずし字」を学び、日本の歴史・文化を研究するための技術を磨くことを目的に開かれている。昨年 9 月、ドイツ・ハイデルベルク大学のワークショップに参加されたスーザン・バーンズ氏（シカゴ大学准教授）の企画により実現し、14 名の研究者が日本の古文書をテキストに研鑽を積まれた。

14 名の所属構成は、シカゴ大学の教員・大学院生のほか、アメリカ各地の大学、さらにはオーストラリアやロシア、スイスからであった。出身国で見れば、日本、韓国、ニュージーランドも加わることになり、改めて世界各地の人々が日本の歴史や文化に関心を持って研究していることが理解できよう。

期間中はシカゴ大学歴史学部の教室にて、毎朝 10 時から休憩をはさんで夕方 16 時まで講義を実施し、テキストには江戸時代の触書（法令）、商人の経営文書、和歌、日記とともに東北大学が所蔵する和書を使用した。受講者の専攻

は、社会史、美術史、経済史、文化史など多彩だが、近世日本の基礎資料を学ぶことに力点を置き、初心者でも習得が可能なプログラムを盛り込んでいる。夕方 16 時以降は希望者を対象に、各自の普段取り組んで

いる課題について相談する機会を設け、研究状況の確認や関係資料の所在について議論を深めることができたと考えている。また、同大学の東アジア図書館が所蔵する膨大な図書にも感銘を受けた。

ワークショップ終了の翌日（6 月 21 日）にはミニシンポジウムが開催され、参加者それぞれの研究のうち 8 本の報告がおこなわれた。中世瀬戸内海の内海運、文学作品から日本の近世社会を復元する試みなど、歴史資料を有意義に活用した意欲的な発表が並び、学術交流の意義を痛感した次第である。

（荒武 賢一朗）



ワークショップの様子



シカゴ大学のキャンパス

最近の研究会

③ 東北アジア研究センター共同研究

「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」

平成26年度第1回研究会

本共同研究の本年度一回目の研究会が、去る6月14日(土)午後、東北アジア研究センターのある東北大学川内北キャンパス川北合同研究棟4階大会議室で開催された。今回は、東北アジア研究センター客員教授として4月から滞在中のモンゴル科学アカデミー歴史研究所所長サンピルドンヴ・チョローン博士より、「17世紀におけるロシア皇帝とモンゴル王族の関係：ロヴサンの「乱」に関して」と題する講演が行われた。チョローン教授は、17世紀を中心とするモンゴルとロシアの関係を、ロシア所蔵のアーカイブ資料を駆使して研究している気鋭の研究者である。今回は、当時ロシアがモンゴルに派遣した使節団の報告書に基づき、モンゴル西北部の有力王族アルタン・ハーンの対口交渉を活写した。続いて三件の研究報告が行われた。上野稔弘氏(東北アジア研究センター)「20世紀前半の中蒙境界をめぐる紛争と交渉」は、中華民国側の資料に基づいて、アルタイ山脈地域でのモンゴル国と中国の国境をめぐる交渉を論じた。小沼孝博氏(東北学院大学)「清末ホヴド地区における政治と移住：1838年のカザフ侵入事件とその影響」は、清朝档案資



講演するチョローン博士

料を用い、アルタイ山脈西北麓におけるカザフの進入・移住様態をめぐる問題を論じた。水盛涼一氏(東北大学大学院文学研究科)は、「嗜好と査定：清朝末期のアヘン吸引と官僚管理」と題して、清代の官僚が用いたアヘンの問題とこれに対する査定の実態を論じた。今回の講演・報告では、奇しくも三件が、モンゴル西北部、中国新疆東北部のアルタイ山脈地方におけるモンゴル・カザフ・清朝～中国・ロシア～ソ連の政治的関係を詳細に考察・論述したものであった。これらの成果は、いずれもアーカイブ資料の調査によって得られた新出史料を用いた成果である。また水盛氏の報告は、清朝の官僚の行動様態をヴィヴィッドに論じた興味深い研究であった。近代史はもとより、清代史においても、各地のアーカイブ資料抜きの研究はおよそ考えられないものとなって久しい。今後は個々の研究成果を統合しつつ、そこからいかなる地域史理解を得ることができるのか、議論を行っていくことが求められるだろう。(岡 洋樹)

④ 東北アジア研究センター共同研究

「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」

2014年度第2回研究会

本共同研究は宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会より前年度まで受託した「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の成果であるオンラインデータベース「みやしんぶん」を中心に、民族誌情報の社会への提供の意義や、活用の具体的な方向性を検討することを目的としている。その今年度第2回目にあたる本研究会では二部構成でディスカッションを行った。

第一部「ブレインストーミング『みやしんぶんデータベースの活用と展開』」では高倉浩樹氏(東北大)、山口実花子氏(岐阜大)、滝澤克彦氏(長崎大)、及川高がそれぞれ実際にデータベースを使用した上での所見を述べ、それを元に議論を交わした。具体的にはデータベースにおける叙述の有用性と限界について、特に現実社会の様々な活動(教育現場、復興事業、観光、ボランティア支援等)での活用に供するために解決すべき課題が検討された。なおこの場にはデータベース開発にあたった日本総合システム社(NSS)のスタッフ2名と、第二部の講演者であるシテエガ



講演するブリギッテ・シテエガ博士

氏も参加した。NSSからはデータベースの調査情報共有ツールとしての活用、及びソーシャルメディアとの組み合わせといった方向性が提案された。またシテエガ氏からは、自身の調査経験から意見を寄せていただいた。

第二部ではブリギッテ・シテエガ氏(ケンブリッジ大学)より「The ethnographer in the hinanjo -Yamada-machi, Iwate 2011」(避難所の民族誌家：2011年岩手県山田町)と題した講演をいただいた。氏は震災直後から岩手県の避難所でフィールドワークに携わり、その成果は『東日本大震災の人類学』(トム・ギルほか編 2013年 人文書院)に一部が報告されている。今回の講演では主に氏が調査地に入っていたプロセスについて、自身の経験や所見を交えつつ、事実関係を中心に報告いただいた。その後のディスカッションでは被災地における人類学的調査の意義が議論され、受託調査との方法的差異なども踏まえつつ、より有効な調査と研究のあり方をめぐって議論が深められた。

(及川 高)

5 東北アジア研究センター共同研究

「華人の移動とその「故郷」についての民族誌的研究— 華僑華人研究の新たなパラダイムに向けて」研究会

本研究会は、同名の東北アジア研究センター共同研究（代表者・川口幸大、平成26年4月～平成27年3月）の一環として、本年8月2日に東京大学駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3において開催されたものである。

従来の華人研究・僑郷研究では、福建・広東出身の人々が東南アジアや欧米で成功して「貧しい」故郷を支えるというパターンが定石となってきたが、経済発展の著しい近年の中国においては、この枠組みには収まりきれない現象が多々みられる。そこで本共同研究では、中国にルーツを持つ人々の移動とその故郷との関係性について、従来の研究枠組みを動的な視野の元にとらえ直すとともに、最新のフィールドデータを持ち寄って議論することで、華僑華人研究、ひいては移民研究の新たなパラダイムを展望することを目的としている。

当日のプログラムは、趣旨説明（川口幸大・東北大学）、発表1「朝鮮族の移住者たちにとっての『故郷』—延辺朝鮮族自治州の事例から」（李華・延辺大学人文社会科学学院）、

発表2「雲南省における『僑郷』景観の創出—紅河県を事例として」（河合洋尚・国立民族学博物館、阿部朋恒・雲南大学）、発表3「感情という視点からみる『僑郷』の再認識—マレーシアの広西籍華人・呂氏の僑郷での活動に関する分析をもとに」（陳碧・玉林師範大学、通訳：兼城糸絵・鹿児島大学）、コメント（瀬川昌久・東北大学）、討論。

発表事例はいずれも、従来の典型的な僑郷地域からの移民を扱ったものではなく、少数民族地区など周辺地域からの人の移動や、僑郷概念自体の文化資源化などに注目した先端的かつ興味深いものであった。また、一般参加者として首都圏地域在住の関連研究者をはじめとする数十名の参加を得、新パラダイム構築に向けた有益な議論を展開することができた。

なお、本研究会は東北アジア研究センターの「現代中国社会の変容に関する文化人類学研究ユニット」が運営する3つの共同研究の1つとして実施され、運営事務は本センター教育研究支援者の稲澤努が担当した。（瀬川 昌久）

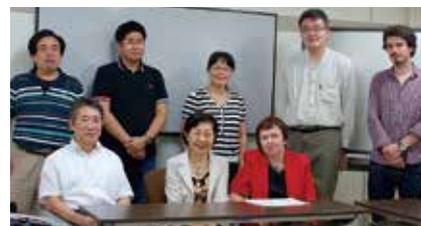
6 東北アジア研究センター プロジェクト・ユニット

「20世紀ロシア・中国史再考プロジェクト 研究ユニット」研究会

2014年7月26日、「20世紀ロシア・中国史再考プロジェクト研究ユニット」主催の第1回研究会を開催した。講師は客員教授として滞在されているナタリア・クリニチ先生で、テーマは「1920-30年代ソ連極東諸都市における日常文化史」であった。

ここで用いられる「日常文化」とは、人間存在を現実的に規定している価値観、世界観、行動規範の総体のことで、特に20世紀30年代までのソ連極東の特徴は、地域の開発、工業化の結果として生じた急激な都市化だった。ロシア革命時に2割を越える程度だった都市住民が1930年代末に5割を占めるまで増加し新しい都市が次々に誕生した。その結果住宅不足は深刻さを増し労働者バラック、掘立小屋が見慣れた光景となった。圧倒的に若年層で占められる移住が増加する人口の源泉で、女性が極端に少ない人口構成となった（1937年には男性の7割）ため、女性を呼びよせる「ハタグーロヴァ運動」が展開された。ソ連の近代化モデルは「文化革命」と呼ばれ、ソ連社会が共産主義イデオロギーを習得し、「新しい」ソ連人を作ることを目的とした。初頭教育だけでなく特に中等教育進学者が大幅に増えたことが特徴として挙げられ、大人に対しては特に「政治的文盲」を撲滅する教育が進められた。子供たちには幼児期から政治教育が施された。その結果識字率は革命後の20年で劇的に改善した。都市民が余暇を過ごす図書館、映画館、劇場、

博物館、様々なクラブなどでも



研究会参加者一同

政治教育が行われ、チェス、ダンス、スポーツも盛んで、大衆の精神には新しいソヴィエトの慣習が埋め込まれていった。イデオロギー的に「新しい」ソヴィエトの人間のモデルにふさわしくない者はすべて、過去の遺物とみなされるにいたった（宗教的信仰、酔っ払い、麻薬、売春、狼藉行為などの不埒な行為、家父長的な家族関係等）。新しい価値観を伝える重要な役割を担ったのが祝祭日に行われるデモや集会だった。貴重な写真をふんだんに用いられたわかりやすい発表だった。

参加者は、生田美智子大阪大学名誉教授、伊賀上菜穂中央大学総合文化学部准教授（元東北アジア研究センター教育研究支援者）、ケンブリッジ大学研究員ドミニク・マーチン氏のほか、浅岡善治東北大学文学部准教授、金野文彦氏、ユニットの教育研究支援者麻田雅文氏が加わり、約3時間にわたり幅広い問題についてロシア語による濃密な質疑応答が続けられた。その後場所を移した懇親会でもクリニチ先生とは東北大学ばかりでなく学外からの参加者によるハバロフスクの大学との学術研究交流、学生の訪問、ロシア極東における研究会への参加等、今後の研究協力の拡大・発展についても議論が続きとても有益な研究会となった。（寺山 恭輔）



BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究専書 5号
ヘラジカの贈り物：
北方狩猟民カスカと
動物の自然誌



山口未花子著
2014年2月(株)春風社
B6判、378頁

本書は、野生動物に大きく依存してきた北米の狩猟採集民カスカの狩猟を中心とした人間と動物との関係を、活動の量的なデータによる生態学的な分析とともに、参与観察によって明らかになった世界観や文化的・社会的な側面についても記述したカスカと動物の自然誌である。さらに、東北アジア地域を含む人類の北方適応を支えた狩猟文化の形成や、人と動物を、同一性を持つものとしてとらえる思考といった重要な知見について検討している。また、伝統的狩猟社会が現代社会の中で変容しつつも、狩猟という活動を通して再生産されている様子についても報告している。

東北アジア研究専書 6号
ロシア綿業発展の契機
—ロシア更紗とアジア商人—



塩谷昌史著
2014年2月(株)知泉書館
A5判、252頁

帝政ロシアとりわけ19世紀前半におけるロシア綿業の発展を通して、ロシアの初期工業化の実態を解明する。ロシア綿業の発展と共に、ロシア製更紗がアジア市場に輸出される。ロシアはペルシア、中央アジア、清などのアジア市場へ製品を輸出する際、アルメニア商人やブハラ商人、山西商人などの近隣商業圏の既存の商業ネットワークを活用した。従来の経済史が生産重視であったことを省み、年周期で営まれていた遠隔地貿易の流通構造や消費者ニーズも研究対象とする。また、自然環境と人間の関係に着目し、民俗学で開発されたモノの研究を採用し、ロシア製更紗の生産・流通・消費を一連の回転と捉え、ユーラシアにおけるモノの流れを明らかにする。

東北アジア研究
第18号



東北アジア研究センターが年1回発行する学術雑誌『東北アジア研究』は、東北アジアとその隣接地域をふくめた地域研究およびその関係分野の発展に貢献することを目的としている。

最新号の第18号には、次の6篇の論文のほか、史料紹介(1篇)、研究動向(1篇)、書評(4篇)が掲載されている。

- The political status and ethnic identity of Siberian nomadic "aliens" in the first half of the 19 century (Andrain Borisov)
- 清末の内モンゴル・ハラチン地域における巡警局創設について(包呼和木其尔)
- 辛亥革命前後のモンゴル独立運動と内モンゴル王公：アマルリングイ(博王)の動向に着目して(布日額)
- フルンボイル遊牧社会における地縁結合：Ya. シャーリーボー氏の口述に現れた"アイマグ"をめぐる(中村篤志)
- 現代中国における宗族の再生と文化資源化(瀬川昌久)
- 墓の変化から見る韓国の家族(澤野美智子)

東北アジア研究センター
活動報告 2013



東北アジア研究センターの2013年度の『活動報告 2013』が6月30日に出版された。A4判339頁の活動報告は、本センターの年間行事、組織運営活動、共同研究、個人研究、成果公開、等すべての活動をカバーするもので、主な内容は次の通りである：

- 2013年度行事表
- 総合的自己評価
- 組織運営活動、研究活動(プロジェクト研究ユニット、共同研究、公募共同研究、学術協定)
- 研究成果公開(刊行物、講演会、共同研究会、データベース)

さらに教員の研究活動では、センターに所属するすべての教員の昨年度における研究成果(著書、論文、研究発表、講演)をはじめ、教育活動、社会活動の詳細が記録されている。

『活動報告 2013』は、次のホームページにPDF版が置かれている：

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/img/report/katudouhoukoku2013.pdf>

客員紹介



●客員教授
ナタリア・ゲン
ナディエヴナ・
クリニチ

ナタリア・ゲンナディエヴナ・クリニチ先生はロシアのハバロフスクにある太平洋国立大学で哲学・文化学科の副学科長を務められていますが、本年4月29日に来日されました。先生はロシア史、ソ連時代のロシア極東の歴史を研究されていますが、授業では哲学や文化学その他非常に多様な分野で教鞭をとっておられるようです。現在の研究テーマは『1920—30年代ソ連極東の都市住民の日常文化』で、我がセンターでもこの研究を続け、7月26日に開かれたセミナーでその研究成果を発表されました。このテーマで執筆された御著書はモスクワだけでなくロシア極東の各地に保管されている文書館史料や新聞、雑誌を渉猟されてスターリン時代のロシア極東の特

色について、これまでの類書に見られないほど詳しく描かれたもので非常に参考になるものです。

「センターにみられる好ましい創造的雰囲気、同僚との情報や意見交換は、外国人研究者が適応する困難を和らげて、その実りある研究を促している」「日本滞在で現代の日本社会の日常生活に触れ、この最も人間に身近なレベルでロシアと日本文化の類似点と相違点を体験する機会に恵まれました。日本の文化に触れたことで、日本語の学習を始めることにもなりました」との印象を伝えられました。7月末から10日ほど滞在された御主人と花火や七夕祭り、美しい仙台の街や自然を満喫され9月1日にセンターでの研究を終え、離日されました。(寺山 恭輔)



●客員教授
エレナ・
ニコラエヴナ・
チェルノルツカヤ

エレナ・ニコラエヴナ・チェルノルツカヤ先生は、ロシア極東ウラジオストックにあるロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・極東諸民族人類学研究所の主任研究員です。専門はソ連時代のロシア極東史で、移住プロセスのエスニックな特徴、極東の労働資源確保の性格・形態等の他に、極東におけるスターリン時代の弾圧政策の特殊性の解明にも注力して来られました。『1920-1950年代のソ連極東における強制移住』と題した論文で博士号を授与され、モノグラフとして出版されました。アカデミーが出版する学術文献の編集や、学術シンポジウムの組織にも従事されています。

2度目の訪日ですが、2005年に来日した際、東京経由で箱根の温泉に宿泊され、

日本に非常に強い印象を受け、富士山の美しさに驚嘆されたそうですが、火山の多い故郷カムチャツカでは、地元のアヴァチンスキー山に登ったそうです。若いころからリュックを背負って各地(バイカル、沿海、サハリン、カムチャツカ半島)を歩きまわるのが趣味で、最近は旅行者としていろいろな国を見て回っているそうです。カムチャツカでの子供時代に山岳スキーに親しんだので、今でもスキーに関連したことから何でもやるとのことですが、残念ながら滞在は11月末までなので、センターのスキー部とは交流できそうにありません。滞在が数日重なったクリニチ先生から仙台生活のイロハを教わり、スムーズに研究生活に入ることができました。(寺山 恭輔)

受賞

●高橋一徳助教が、みやぎ産業科学振興基金より平成26年度研究奨励賞を受賞

東北アジア研究センターの高橋一徳助教が、一般財団法人みやぎ産業科学振興基金より平成26年度研究奨励賞を受賞し、5月17日にはホテルメトロポリタン仙台にて、授賞式と研究発表会が開催されました。本賞は、宮城県内の大学・研究機関の中から、産業技術に関して特に優れた研究業績を納めた若手研究者に授与されます。

今回の受賞は研究課題「地中レーダを用いた人道的地雷除去のための土壌評価」に対するものです。本研究課題では、土壌不均質性を解析することで地中レーダを用いた地雷探知機の性能を評価する手法を提案しており、本手法により人道的地雷除去活動における作業効率や安全性の向上が期待できます。選考では、本手法が地表面での土壌の乱雑さを定量的に計測できること、また世界規模で取り組んでいる地雷除去活動の効率向上に大きく貢献することが高く評価されました。また、高橋助教は、前職のライプニッツ応用地球物理学研究所勤務時より、地中レーダ性能と不均質土壌に関する研究を行っており、人道的地雷除去技術評価を行っている国際機関の一員として、地雷探知機の評価試験などへ参画していることも評価されました。



●特任助教
前田 しほ

2014年7月1日より特任助教として赴任いたしました。センターの研究活動の運営企画を研究者の視点からお手伝いするのが業務です。院生・ポストク時代を通じて北海道大学のお世話になってきたので、2009年ー11年のモスクワ留学を除けば、久々の新天地でのスタートとなります。よろしくお願いたします。

専門は20世紀ロシアの文学・文化です。博士論文では、文化的社会的に適切とされる「女らしさ」への女性の反抗と生き方の模索に関心がありました。その後、時代を遡って女性作家の創作活動を調べているうちに、制度としての文学がジェンダーやナショナリティ構築にいかに関与しているかという点に関心がシフトしました。ソ連女

性（だけでなく、男性）がいかに国民となっていたのか、つまり、オルタナティブな文学が抗っているところの「規範」、理想とされる女性イメージ（あるいは男性イメージ）です。現在力を入れて取り組んでいるのが、旧ソ連各地に残る戦争記念碑です。ジェンダーの非対称性がナショナル・アイデンティティに深く関わっていることがわかってきました。最初はどれも同じように見えたのですが、男性像と女性像の機能が異なること、モチーフに地域性・時代性があることがわかってきました。旧ソ連圏だけでなく、ほかの共産圏や、あるいは共産主義に対抗する文化における戦争記憶にも関心を広げているところです。



●特任助教
町 澄秋

2014年9月1日より、東北大学東北アジア研究センターの研究支援部門の一員に加わりました町澄秋と申します。2002年に金沢大学に入学し、学部、博士前期・後期課程、博士研究員として、地球科学の研究をしてきました。中でも専門は、岩石学で、主に地球深部のマントルを構成していると考えられているかんらん岩という岩石から、地球深部プロセスの解明に取り組んできました。特に、博士後期課程からは、ロシア極東のコリヤーク山地をフィールドとし、そこに露出するかんらん岩から、日本列島のような島弧の下のマントルプロセスに着目して研究しています。この島弧という場

所は、地球上で火山活動が盛んな場所の一つです。それは、島弧の下のマントルのかんらん岩が溶けることで、マグマが盛んに発生しているため、島弧の下のマントルプロセスを理解することは、マグマプロセスを理解することにつながるため重要だと考えられています。

さて、東北アジア研究センターでは、研究支援部門で、研究管理者として、センターの研究推進事業の企画・立案・運営に関わる実務および研究連携支援を行ってまいります。センターの皆さまと協力し、センターの発展に寄与できればと考えております。どうぞよろしくお願いたします。



●産学官連携研究員
飯塚 泰

2014年5月1日に産学官連携研究員として佐藤研究室に着任しました。情報通信研究機構（NICT）委託研究業務として電磁波を用いた建造物非破壊センシング技術の研究開発を主に行っています。震災などによりダメージを受けたと思われる建造物を合成開口レーダー（SAR）により内部状態を可視化し、損傷の判定に活かすことが目的です。レーダーによる非破壊センシングが実用化できれば、現在問題になっている高度成長期に建造した様々なインフラの検査に使用することができるのではと考えています。社会に大きく貢献することができるともやりがいがある研究です。

20年前に修士課程を卒業後、アンテナの会社に就職したのを機にアンテナのエン

지니어として過ごしました。初めの10年間は携帯電話基地局アンテナ、衛星携帯電話用アンテナ、衛星デジタル放送用アンテナ、方向探知用アンテナなど様々なアンテナの開発に関わりました。その後、韓国企業で2年間、携帯電話用アンテナやノートPC用地上デジタル放送受信アンテナの開発を行いました。更にアンテナの研究を極めようと博士課程に進学し、何とか学位を取得しました。1年以上の就職活動の末、現在の職に就くことができました。

私にとってレーダーの研究は未知の部分がたくさんあり、新しいことへチャレンジする毎日です。大変ではありますが刺激的な仲間と整備された環境で研究できる喜びに感謝しています。

活動
風景

中国近現代史研究における公文書史料の活用

東北アジア研究センター准教授 上野 稔弘

筆者は現在本センターの寺山教授とともに「20 世紀ロシア・中国史再考」研究ユニットにおいて、中国史とソ連（ロシア）史の両面から、1930 年代から 50 年代にかけての時期における両国の交界地域における民族政策の展開およびその相互的影響について研究を行っている。この活動の背景となっているのはここ数十年の間に世界各地で急速に進展した 20 世紀前半期の公文書の公開であり、これら公文書史料は一次史料としての重要性を持っている。以下に筆者の研究関心である中国の民族問題に引きつけ、中国関係の史料公開状況を紹介するとともにいくつかの問題点をも含め展望を示したい。

20 世紀前半の中国すなわち中華民国の歴史研究において、台湾の公文書所蔵機関で大陸反攻政策が停止した 1990 年代以降推進された、南京国民政府文書および蒋介石文書の公開は、内外の民国史研究者の関心を集め、日本や中国大陸における民国史研究ブームを引き起こした。これについて筆者はニューズレター第 42 号（2009 年 11 月）で詳しく紹介したが、その後台湾では公文書史料のデジタル化が進行し、閲覧環境が大きく変化している。

例えば国史館では南京国民政府文書および蒋介石文書のデジタル画像データ化がほぼ完了し、台北市中心部にオープンした分館（写真）の閲覧室にある PC 端末で閲覧することができる。また 2014 年 1 月からは事前申請を行うことで館外、すなわち日本においても Web 上で南京国民政府文書を閲覧できるようになった。また国史館とならば民国文書所蔵機関である中央研究院近代史研究所檔案館においても外交部檔案のデジタル化が行われ、辺疆民族問題をめぐる外交文書を PC 端末で閲覧することができる。以前は原本閲覧であったため訪問前に閲覧申請を行い、台湾外交部の許可を得ておく必要があったが、現在は閲覧室カウンターで申請を行えば 10 分程度で閲覧できるようになっている。このように台湾における史料閲覧状況は年々改善が進んでいるが、他方で目を通すべき史料の分量が飛躍的に増加し、収集と分析に要する時間や労力もそれに伴い増大するという状況も生まれている。

民国史研究でもうひとつのエポックとなっているのが『蒋介石日記』の公開である。民進党政権下での蒋介石批判を懸念した蒋介石の遺族が日記を台湾から持ち出し、アメリカ・スタンフォード大学のフーヴァー研究所（写真）に日



国史館分館



フーヴァー研究所

記の管理・公開を委託したことで、近年中国近現代史研究者の「フーヴァー詣で」を引き起こしている。日記はマイクロフィルムに撮影の上、深緑色の紙に印刷したものが基本的に 1 月分ごとにファイリングされて閲覧に供されており、閲覧室に置かれた罫線紙に鉛筆で内容を筆写することはできるが、電子複写やデジカメ撮影などは認められず、PC での入力もできない。不便この上ないが、一日 12 行の紙面に毛筆で隙間無く書き込まれた蒋介石の筆致と生々しい記述を目にする魅力は労苦を忘れさせる。『蒋介石日記』は出版物としての刊行も予定されていたが、遺族間の相続権をめぐる争いから当面のめどが立たなくなっているだけでなく、日記を公開しているフーヴァー研究所も裁判所に調停を求める事態となっており、公開が継続されるかどうか懸念される。

こうした公文書等の一次史料閲覧の機会増大は、これまで史料不足により制約された民国期の辺疆民族問題の研究状況を大きく変えた。例えば中国共産党は民国期の民族政策について、長らく「国民党反動派による暗黒統治」という評価を下していたが、一次史料の分析からは、抗日戦争の状況下で連合国側に立つことに成功した国民党政権が、同じく連合国側に立つソ連やイギリスとの交渉やアメリカの仲介により辺疆地域における外国の影響排除を試み、その中で民族自決を目指す非漢族勢力との交渉や民族政策にも様々な曲折が生じているという状況が浮かび上がってくる。中国の民族問題は近年再びホットな話題となっており、問題の歴史的淵源を理解するためにも、筆者としては史料公開によりもたらされた大量の情報の読み解きを加速してゆく必要を感じている。

編
集
後
記

9 月 4 日から中国の内蒙古大学蒙古学学院に約 1 か月間滞在してきました。ちょうど本号の入稿と初校に重なる時期でしたが、編集作業はすべてメールで対応させていただきました。関係者の方々のご協力に感謝致します。インターネットの便利さを実感しましたが、中国の事情は制限付きです。時々繋がらなくなるのはホテルや個別の事情かもしれませんが、Gmail、Google 検索は一律に使えず（繋がらない）、日本のニュースなどホームページの表示が異常に遅く、いつも当たり前に使っているものが使えない不便さも体験しました。（栗林 均）

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第 62 号 2014 年 10 月 31 日発行

編集 東北アジア研究センター広報情報委員会

発行 東北大学東北アジア研究センター 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>



植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。